

競争の作法 齊藤誠

・豊かさと幸福の定義

まず、豊かさと幸福を定義しておこう。経済学でいう豊かさとは、生産活動によって生み出されたものの価値の総量ある。一方、幸福とは、生産されたものを消費することで享受できる効用の大きさである。

・円高是正の為替介入が、海外投資家を利することになる皮肉

2003年と2004年の介入総額は、35兆2564億円に達した。2003年と2004年の海外からの純流入額約10兆円の3倍を超えたのである。かつてこのような規模の為替介入はなかったし、今後もないであろう。まさに、空前絶後である。

未曾有のドル買い・円売り介入、あるいは、ユーロ買い・円売り介入は、円高を阻止することに一定の効果があつた。円対ドルレートは、2005年111円、2006年116円、2007年118円と円安基調が定着した。輸出企業にとっては、朗報であつたであろう。

しかし、見方を変えてみると、大規模な為替介入による円高阻止は、海外勢ができるだけ安値で日本の資産を購入するのを手伝つたことになる。海外投資家にとっても、財務省の為替介入はありがたかつたといえる。

財務省の介入行為は、このように突き放してみせると、お人好しともいえるし、ナショナリスティックな心情が勝つてしまうと、売国奴ということにもなるだろう。

・銀行は国債で儲けを出す商売

投資家の視点から考えてみると、デフレが起きたことが問題だったのではなく、デフレがある程度進まなかつた方が問題だった。物価水準が安定した結果、国債や預金などの安全な投資機会の実質的な利回りが十分に高くならなかつたからだ。

本来であれば、資金が国債市場から引き揚げられ、預金が銀行から引き出されてもおかしくなかつた。そうしたことが起きなかつたのは、2002年末に預金保険法が改正されて、2003年4月以降、普通預金や当座預金は全額保護されたからである。国が国民に対して「預金は絶対に大丈夫だ」と太鼓判を押したのである。たとえ預け先の銀行が破綻しても、普通預金や当座預金に預けていた資金は、全額、預金者の手許に返すことを、国が国民に対して約束した。

その結果、人々は、「自分の家に大きな金庫を置くよりはまし」という消極的な理由から、銀行に資金を預けた。銀行は、人々から預かつた資金を国債市場に投じた。長期金利は低くなつたとはいえ、ゼロ水準を依然として上回っていた。したがって、銀行は、ゼロ金利で資金を調達し、国債市場で1%を上回る利回りを確保できたので、利ザヤは確実に得られた。銀行業は、融資先を必死で探す必要もなくなつて、ずいぶんと楽な商売になり下がってしまった。こうした事情は、銀行の利害を一身に背負つたエコノミストたちが、ゼロ金利政策と預金保険の拡充を必死に、狂つたように求めた理由でもあつた。

・競争原理

競争原理とは、「生産への貢献に応じて生産の成果を分配する原理」のことである。市場経済において競争原理が最優先されるのは、競争原理こそが社会の豊かさの基盤を形成するからである。

まずは、生産による成果の分配を生産への貢献に直結させることによって、人々から生産に対する最大限の努力を引き出し、できるだけ高い生産水準を実現する。そして、そうして実現された高水準の生産が豊かさの社会的基盤を支えていく。

平たくいうと、競争原理は、「報われるかぎりで努力する」という人間の本性に深く根ざしている。

確かに、新聞記事に国債売却益が記載されている。
<産経新聞より>

The Asahi Shimbun				
3メガバンクの2012年3月期決算				
	業務純益	純利益	国債などの売却益	不良債権の処理費用
 MUFG 三菱UFJ	1兆1710 億円 (1.2%増)	9813 億円 (68.3%増)	2651 億円 (25.2%増)	1345 億円 (396億円減)
 SMFG 三井住友	8130 億円 (2.3%減)	5185 億円 (9.0%増)	1525 億円 (3.7%増)	586 億円 (356億円減)
 MIZHO みずほ	7281 億円 (1.9%減)	4845 億円 (17.2%増)	1551 億円 (10.3%増)	-247 億円 (利益が87億円増)

()内は前期比。業務純益は本業のもうけ。純利益は連結、それ以外の項目は傘下主力銀行の合計額。不良債権処理費用のマイナスは、過去に損失を見込んで引当金を積んだものの、実際の損失額がそれよりも小さく、利益として戻つてきた額